

2021年9月12日

Nociplastic pain の日本語訳に関する用語委員会提案【要約版】

日本痛み関連学会連合用語委員会

概要

日本痛み関連学会連合用語委員会は、国際疼痛学会(IASP)が「第3の痛みの機構分類」¹として提唱した ¹nociplastic pain² の日本語訳を以下のように提案します。

痛覚変調性疼痛

(原文解説訳) 侵害受容の変化によって生じる痛みであり、末梢の侵害受容器の活性化をひきおこす組織損傷またはそのおそれがある明白な証拠、あるいは、痛みをひきおこす体性感覚系の疾患や傷害の証拠、がないにもかかわらず生じる痛み(注記:患者が、侵害受容性疼痛と痛覚変調性疼痛を同時に示すこともありうる)。

したがって、痛みの3つの機構分類 nociceptive pain, neuropathic pain, および nociplastic pain を、以下のように併記することを提案します。

痛みの3つの機構: ①侵害受容性疼痛 ②神経障害性疼痛 ③痛覚変調性疼痛

提案の根拠

1. 日本語訳は、以下の3つの要素を満たすことが求められました。

- (1)「Nociplastic pain」という新語が伝えようとする新概念を伝えうる新規性を持つこと。そしてその語によって既存の語では十分に表せなかった機序を表現できること。
- (2)他の二つの機構分類との区別が明白で、誤解を招きにくく、列挙しやすいバランスが考慮されていること。
- (3)疼痛科学専門家、医師、医療関係者、教育者、学生、ならびに、患者を含む一般市民にまで用いられる語として、過度に専門的ではなく、わかりやすく、しかし専門用語としての厳密性も有していること。

2. 本提案が選ばれた根拠:

委員会は、「nociplastic」の「noci-」と「-plastic」をどのように日本語化するか、多くの候補と用例、それらの可能な組み合わせを俎上に乗せて検討しました。

(1)「noci-」について

原文では、「altered nociception に起因する」痛みとされているが、解説論文には「altered nociceptive function」¹「altered nociceptive pathway」¹、「altered nociceptive processing」³などの表現があり、ここでの「noci-」は、「侵害刺激の符号化過程」としての狭義の nociception だけではなく、末梢から中枢までの「痛みの成立に関わる機構と過程」を包括的に指し示していると解釈される。

これに対応する用語として「痛覚」が挙げられた。痛覚は、「聴覚」「視覚」などのように、固有の感覚に関わるシステム全体を指す用例が多く、「侵害受容」²と「痛み」²の間にあるさまざまな機構を示せる語感がある。また、他の2つの語(侵害受容性および神経障害性)には用いられていないため、誤解や混乱を避けられる。

(2)「-plastic」について

医学生物学領域における plasticity の訳語として「可塑性」があるが、「神経可塑性」「シナプス可塑性」「脳の可塑性」以外にほとんど用例が見当たらない。ここでの「-plastic」は、神経可塑性のみに限局されておらず、原語でも「変化を示している状態(altered)」を指す幅の広い語として用いられている³⁻⁹。一方、「可塑性」には「物体に圧力などの外力を加えて変形させ、外力を除いても物体が元の形にもどらない性質」(日本語大辞典, 講談社)との定義もあり、医療者から患者まで広く用いられる表現としては望ましくない誤解を招くおそれもある。「変調性」は、原語の意味・用法から大きく離れず、また、指示する内容を理解しやすい。

以上の根拠に基づき、委員会は、上記の「痛覚変調性疼痛」を提案するに至りました。

日本痛み関連学会連合用語委員会委員

加藤総夫(疼痛科学有識者・委員長)

牛田享宏(日本疼痛学会)

高雄由美子(日本ペインクリニック学会)

伊達 久(日本慢性疼痛学会)

二階堂琢也(日本腰痛学会)

園畑素樹(日本運動器疼痛学会) 大久保昌和(日本口腔顔面痛学会)

松原貴子(日本ペインリハビリテーション学会)

山脇健盛(日本頭痛学会)

小山なつ(疼痛科学有識者)

住谷昌彦(オブザーバー)

臼井千恵(オブザーバー)

引用文献

- 1) Kosek E, *et al*, Do we need a third mechanistic descriptor for chronic pain states? *Pain* **157**:1382–1386 (2016).
- 2) International Association for Study of Pain, Pain terminology (2021).
- 3) McPhee ME, HB Vaegter, T Graven-Nielsen, Alterations in pronociceptive and antinociceptive mechanisms in patients with low back pain: a systematic review with meta-analysis. *Pain* **161**:464–475 (2020).
- 4) Bailly F, *et al*, Part of pain labelled neuropathic in rheumatic disease might be rather nociplastic. *RMD Open* **6**:1–6 (2020).
- 5) Fitzcharles MA, *et al*, Nociplastic pain: towards an understanding of prevalent pain conditions. *Lancet* **397**:2098–2110 (2021).
- 6) Kosek E, *et al*, Chronic nociplastic pain affecting the musculoskeletal system. *Pain Online*: (2021).
- 7) Nijs J, *et al*, Nociplastic Pain Criteria or Recognition of Central Sensitization? Pain Phenotyping in the Past, Present and Future. *J. Clin. Med.* **10**:3203 (2021).
- 8) Trouvin AP, S Perrot, New concepts of pain. *Best Pract. Res. Clin. Rheumatol.* **33**:101415 (2019).
- 9) Shraim MA, H Massé-Alarie, PW Hodges, Methods to discriminate between mechanism-based categories of pain experienced in the musculoskeletal system: a systematic review. *Pain* **162**:1007–1037 (2021).

原文

<https://www.iasp-pain.org/resources/terminology/>

Nociplastic pain

Pain that arises from altered nociception despite no clear evidence of actual or threatened tissue damage causing the activation of peripheral nociceptors or evidence for disease or lesion of the somatosensory system causing the pain.

Note: Patients can have a combination of nociceptive and nociplastic pain